



Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM

Vol. **40**
2016

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

- CONTENTS**
- モスクワ・オブニンスク・サンクトペテルブルグへ専門家派遣
 - チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師へのヒバクシャ医療研修
 - 韓国へ専門家派遣事業(セミナー)を実施
 - 小中学校で出前講座を開催



日赤長崎原爆病院前にて

モスクワ・オブニンスク・サンクトペテルブルグ へ専門家派遣



ライラックの歓迎

長崎大学理事・副学長 山下 俊一

2016年5月中旬、6年ぶりに訪れたモスクワは、快適なシェレメンチボ国際空港に様変わりし、雨模様の中でも可憐なライラックの花々に心温まる歓迎を受けました。今回、チェルノブイリ原発事故から30年という節目の国際会議に招聘され、モスクワの変貌に少なからず驚きました。交通渋滞は大変でしたが、ナシム派遣事業の片峰茂学長と行動を共にする中で、長崎ではなかなか見る事ができないライラック、その花言葉から「思い出と友情」を紹介します。



聖ワシリイ大聖堂の前で



クレムリンのレーニン廟

まずレーニン広場の端にある聖ワシリイ大聖堂の前で、紫色の花が満開なライラックの歓迎を受け、曇天の中で歴史あるクレムリンを散策しました。気温13度前後でしたが、中国人観光客が多いのには驚きました。それに反して、見学の途中、日本人観光客には一人も出会いませんでした。



クレムリンのライラック

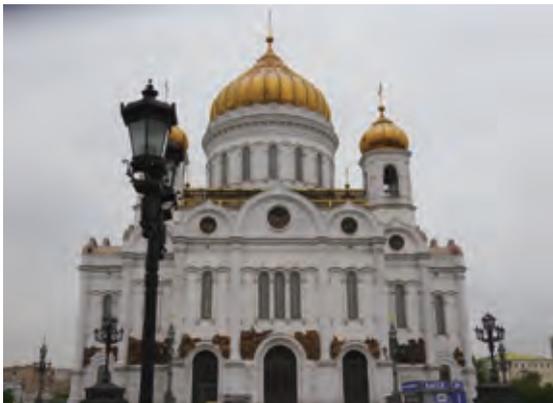


モスクワ通りのライラック

モクセイ科に属するライラックは、欧州原産ですが、ソ連時代から国民的な花として親しまれています。ちなみにロシアの国花の代表はヒマワリです。ソ連、すなわちソビエト社会主義共和国連邦は、1922年から1991年12月25日まで存在したマルクス・レーニン主義国家ですが、ゴルバチョフ大統領が1991年4月に長崎訪問後、8月クリミア半島ヤルタで避暑休暇中にクーデターが起き、12月突然ソ連が解体されるという歴史的な出来事の一コマに、私自身がチェルノブイリ原発事故後の医療支援活動中に立ち会う事ができました。

実は、1991年4月26日、当時の日本船舶振興会会長笹川良一氏（現在は日本財団の笹川陽平会長）が、笹川記念保健協力財団（当時 紀伊国献三理事長）と共に、日本の成田空港から超法規的にアントノフ軍用機で運ばせた5台の検診車の贈呈式を赤の広場で大々的に行い、私自身も5月1日からモスクワから南西100kmの科学都市オブニンスク市で、KGBに守られながら検診立ち上げ作業を指揮したことを昨日のことのように思い出します。その後、ソ連各地（ベラルーシ；モギユロフ市とゴメリ市、ウクライナ；キエフ市とコロステン市、ロシア；クリンシィ市）にパトカー先導でそれぞれ検診車を届けました。

この時の統一した基準で検診活動（甲状腺超音波診断、血液診断、WBC測定）を始めた事が、その後のソ連解体後の困難な情勢の中での長きにわたるチェルノブイリの子ども達約20万人を対象とした巡回検診事業の始まりとなりました。この活動を支える医療関係者を中心として、当初から毎夏の長崎への招聘と、研修指導面での幅広い活動をナシムは担ってきました。



救世主ハリストス大聖堂



モスクワ川のピョートル1世像

歴史を紐解くと、ロシア革命後のソ連では無神論を標榜し、ロシア正教会を弾圧しました。モスクワのクレムリン近くにあった救世主ハリストス大聖堂も1931年スターリンにより爆破され、その後屋外温水プールとして利用されていたそうです。事実、私たちが活動を始めた1990年代前半にはその大聖堂はありませんでした。しかし、2000年には見事に復興を成し、以前のままの雄姿をモスクワ川にかかる歩道橋の上からも堪能することができます。帝政ロシアからソ連崩壊後までの一連の出来事を、ピョートル1世はどのような気持ちで眺めていたのか、船上からサンクト・ペテルブルグを遠望する記念像には哀愁が漂っているようでした。

さて、ソ連時代に5つのセンターで、同時に検診活動を始めたチェルノブイリ笹川医療協力プロジェクトにとり、オブニンスク市にある医学放射線研究所は、情報収集と解析の中核センターであり、現地での指導的立場にありました。この街では、世界で初めて1954年に商業用原子力発電所の稼動に成功し、その後15の関連研究施設が存在する科学研究所の都市となっています。市制60年で、現在の人口は約10万



紫のライラック

人です。なかでも原子力潜水艦用の小型原子力発電器の開発と海軍技術訓練施設や宇宙開発、気象学研究所を有する事で有名です。

この25年間を通じ、様変わりをしたモスクワやオブニンスクを目のあたりにし、これら市内各地や森にある木々達が、不思議にも物言わない生き証人のように思えました。そして、ナシム活動も20年を超え、毎夏の旧ソ連からの研修生受入数も120名を越えて大きな力となりつつあります。ソ連時代の格言では、人は生まれてきた以上3つのことを成就する必要があると教えています。「一つ、家（家庭）をつくる（幸福を求める）。二つ、本を書く（生きた証を残す）。三つ、木を植える（大切な自然を子孫に残す）」その為か、確かに白樺やブナの森やカシタンの並木道など緑が大変豊かです。チェルノブイリ周辺のコルホーズやソホーズを巡回検診中、地元での一期一会の交流の中で、妙にこの言葉に感動したものです。今、25年間の医療協力活動を経て、世代を超えて継承しなければならないもの、すなわち「真実とは何か」を本気で探す必要がありそうです。

しかし、それでも陽気で酔っぱらい文化を残すロシアの大地には、もう一つの格言があります。「狼は森へ逃げる。しかし、仕事は森へは逃げない。明日出来ることは明日に回し、今日を楽しもう」。寸暇を惜しんで、現地で奔走した日本人専門家を、いつも暖かく迎え入れ、ウォッカの洗礼で心の垢を洗い流してくれた現場の仲間達の友情に深く感謝したいと思います。

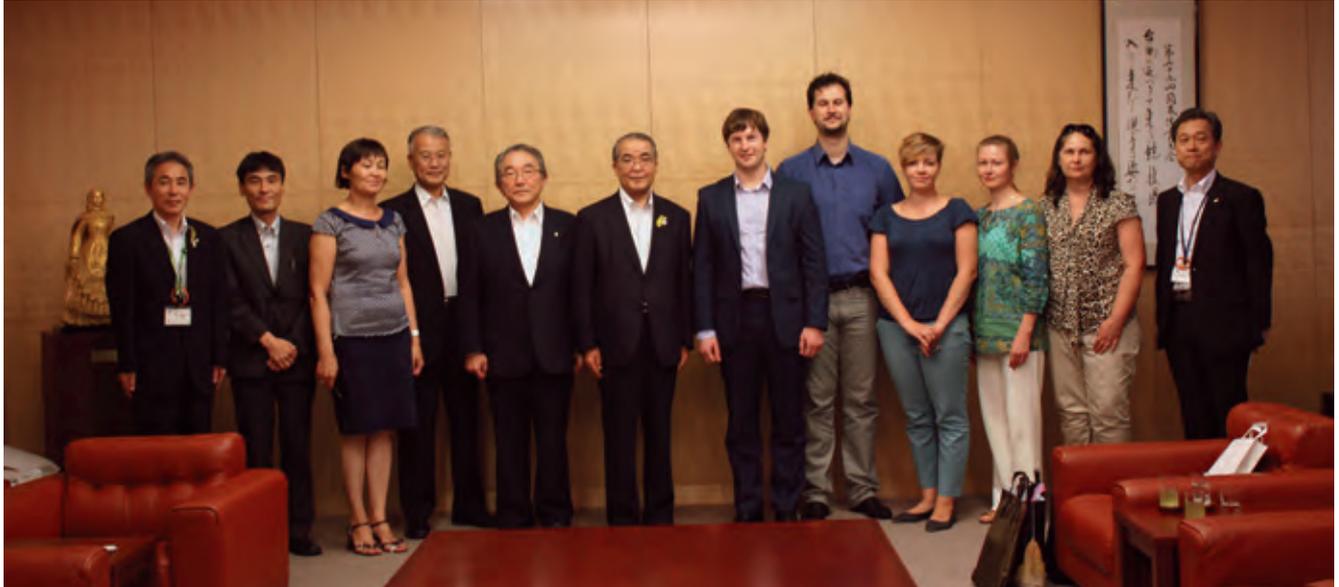
今回のロシア訪問で驚いたのは、豊かな層が増えたと言う事と、プーチン大統領の人気の高さです。クリミア半島併合、ウクライナとの紛争や石油価格暴落と国内インフラ問題等で窮地に立たされているのかと思っておりましたが、訪問した各施設や大学にはプーチン大統領の写真がどこも飾られていました。会う人々からも好意的な発言が多く、モスクワやサンクト・ペテルブルグのレストランでは、日本料理店ではないのに、スシロールが必ずメニューにありました。三大人気メニューは、ピザ、ハンバーガー、そして今やスシロールとのことです。もちろんボルシチスープは定番ですが。

最後に、オブニンスクでの国際会議場の前で、片峰学長が第7回永井隆平和記念・長崎賞の受賞者であった故アナトリ・ツィーブ所長の奥様と歓談されました。ソ連時代からの所長歴を合計すると27年間も放射線防護と医学研究を主導され、チェルノブイリ原発事故後の疫学調査や健康管理、そして国際共同研究の重責を担われて来られたツィーブ所長の栄誉を称えて、2014年以降その名を冠とした研究所に改名されています。国際会議では、多くの友人らに囲まれ、長崎との関係が深い仲間達との友好が深まり、それぞれの立場で活躍している姿を目のあたりにし、大変嬉しく、また誇りでもありました。そして、ナシム活動に貢献頂いた関係各位に心から感謝したいと思います。



片峰学長と故アナトリ・ツィーブ所長の奥様

チェルノブイリ・カザフスタン関連国医師への ヒバクシャ医療研修



長崎県知事、ナシム会長と

今年にはチェルノブイリ原発事故から30年の節目の年です。

ナシムではチェルノブイリ原発事故周辺諸国やカザフスタン共和国で放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対して、指導や医療情報提供を行うため、今年度も6名の医師等を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修者は7月13日から約1ヶ月間、長崎に滞在し、長崎大学を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者との交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学、平和祈念式典への参列など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについても理解を深めました。

【日程概要】

- 7/13 長崎到着
- 7/14～8/1 関係先訪問・見学、長崎大学での共通研修
- 8/2～8/17 長崎大学（病院）等での専門研修
- 8/18 帰国のため長崎出発

【研修生名簿】

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1. バジーレフ レオニード（ロシア） | オブニンスク放射線医学研究所 上級研究者 |
| 2. アイゼンシュタッド アレクサンドラ（ロシア） | サンクトペテルブルグ北西医科大学細胞学研究室 主任 |
| 3. バジーカ アレクサンドル（ウクライナ） | 放射線医学研究センター 放射線科研究者 |
| 4. ズバルースカヤ アンナ（ベラルーシ） | 小児腫瘍学、血液学・免疫学センター副所長 |
| 5. チェルニャコーワ ユーリヤ（ベラルーシ） | ゴメリ医科大学 外傷・整形外科 准教授 |
| 6. クンスリャーモワ トグジャン（カザフスタン） | セメイ医科大学 神経学、精神医学・感染症 准教授 |

研修後の感想



Vasilev Leonid (バジーレフ レオニード)

ロシア連邦 オブニンスク医学放射線研究センター
放射線障害治療 主任

長崎市におけるNASHIM研修の開催に心から感謝の意を表します。原子爆弾とはどんなものでありどのような後遺症があるのかを知見することは大変有意義なことです。ナシムプログラムの研修の結果、現代においてこのような種類の兵器を使用してはならないということは明白となりました。今後、自国において同僚、友人、知人にこの知識を伝達していくことが私自身の主要な義務であると信じます。原子力発電所の惨事における放射能影響の研究は正当な評価を下し、正当な結論を導くことを可能にしています。また、もうひとつのNASHIMの重要な優れた面と言えるのは長崎と広島放射線の影響は終息していること、近年の発展を他国に発信しているという点にあります。私はこれらの都市の美しさやインフラの高さ、社会福祉の手厚さ、市民にとって医療サービスが享受しやすいことなどに驚かされました。高度な先進医療を提供する施設への見学が設定され、医師、看護師の日々の医療行為を目の当たりにすることができました。特筆したいのは、原爆を生き残ってこられた被爆者がまさに見守られながら暮らす高齢者施設への見学でありました。素晴らしい自然、親切で職業能力の高いスタッフ、良い設備は、すべてこれらの患者さんの国における特別な立場を示すものとなっています。各国の現在の指導者らがこれらを目にすることがあったとしたら、地球上に平和が築かれることでしょうし、核兵器の議論に立ち入らないだろうと私は確信します。私は外科医でありますので、長崎大学病院にて外科で研修を受けることができたことが有意義でした。国際医療チームとして働くということは大変有益であり興味深いことでした。様々な外科的疾患治療へのアプローチを見ることができました。末筆ではありますが、日本の招聘側にこの研修のオーガナイズに対して御礼を申し上げます。



長崎大学 増崎病院長と



Aizenshtadt Aleksandra (アイゼンシュタッド アレクサンドラ)

ロシア連邦 サンクトペテルブルグ北西医科大学
細胞学研究室 主任

NASHIMプログラムは医学および生物学の若手の学者にとって放射能が人体に作用する影響についての理解を広げるまたとない機会です。それ以外にも、全人類の観点からも原子爆弾がどれほどの悲惨な犠牲と悲劇を引き起こすかということを知ることも大変に重要なことです。その悲劇は長崎と広島にこのような兵器の使用と戦争そのものが許しがたいことであるという明白な例として刻まれているのです。

研修中私たちは放射線の影響に関する講義を聴講しましたが、DNA損傷の分子レベルのメカニズムから腫瘍の発生の疫学的様相、福島県において原発災害時から医療およびメンタルへの援助がどのように行われているかに至るまで多岐にわたりました。

日本の医療システムを「内側」から見ることができたのは極めて興味深かったです。私は医療施設における日本の同僚の皆さんの驚くほどのオープンさに感動しました。詳細にわたる見学の中で私たちからの質問に答え、実践に即した答えを得ることができ、医師や技師の方たちの仕事を垣間見、また、実際のオペに立ち会う機会さえありました。

私が心を動かされたのは、恵の丘原爆ホームの見学でした。私たちは、原爆の悲劇を生き延びたご高齢の方たちに配慮と敬意をもって接していらっしゃるのを目の当たりにしました。被爆者の方たちの平均寿命の高さはこれらの方々が国家レベルで配慮を受けているという最良の証拠であるということができません。長崎原爆資料館の訪問ではいかに原爆の悲劇の記録が大事に保存されているか、1945年にいかに全国民の意識が変わったか、日本国が、地上に平和を保つことの意義を飽くことなく普及し続ける、平和を愛する国家の一つとしていかに変貌をとげたかということに深く感銘を受けました。

NASHIMの研修では、チェルノブイリと福島原発事故、また、原爆の経験を踏まえ、原発事故や放射線の後影響が、未来に及ばぬようしていくことに研究者らが大きな努力をしていることがはっきりとわかりました。

素晴らしいナシム研修を実施くださいました日本の同僚の皆さんに深い感謝の意を表します。メチニコフ名称サンクトペテルブルグ北西医科大学と長崎大学がNASHIM研修を含め、実り多い協力関係を発展させることを心から祈ります。



長崎市 三藤副市長と



Bazyka Oleksandr (バジーカ アレクサンドル)

ウクライナ 放射線医学研究センター
放射線科 研究者

尊敬する皆さん、今回の研修のオーガナイズと実施に対してNASHIMに最大の感謝の意を表したく思います。私にとっては日本の文化に深く入り込むまたとない機会でした。私はここに滞在することができ多くの文化・名所を知ることができて大変うれしく思います。平和祈念式典や実施された儀式もとても感動しました。自然と都市景観と田園風景に魅せられました。

また、1945年の惨事で肉親や近親者を亡くした方々に心からのお悔やみを申し上げます。私はこの悲劇の犠牲になったすべての方を思い心が痛みます。

同様に、日本政府に対して、我が国の困難な時に、チェルノブイリ原発事故の後処理のみならずその後の復興にも力を貸していただきましたことに心から御礼申し上げます。

私たちの訪問時に温かく出迎えてくださった県、市の職員の皆さんにお礼を申し上げたいです。原爆後障害医療研究所での専門研修は大変気に入りました。とても仕事が楽でした。研究者の私を喜んで迎えてくださり、短期間ではあっても仲間として受け入れてくださいました。原研と大学病院の皆さまに温かく友好的な雰囲気をつくってくださったこと本当にありがとうございました。

様々な施設、研究所で配布された資料や講義でお聞きした情報は大変興味深く、包括的なものでした。たくさんの新しい、そして大変に有益であり、同様に極めて重要な情報です。放射線心臓学の専門家として、また、医者として、私は日常の仕事に、今回得た知識と技術を活用してまいります。

同様に保健施設や医療施設にて、また、社会福祉施設での見学に割いていただいたお時間と業務に心から感謝します。ご助言とご教示をありがとうございました。今回の研修で一緒できたこと大変うれしく思います。

私たちの協力関係が将来にも続くことを希望します。そしてその関係が実りあり、友好的なものであることを祈ります。



平和祈念式典にて



長崎原爆資料館にて



Zbarouskaya Hanna (ズバルースカヤ アンナ)

ベラルーシ共和国 小児がん、血液学・免疫学センター
副所長

放射線障害の被害者への支援に取り組む専門家への研修プログラムは長崎に長年存続している。その誕生によってプログラムは1945年の広島と長崎の両都市に投下された原子爆弾の放射線の影響による後障害の研究により大きな知見をもつことを責務としているものです。日本の研究者らが現在有する知識は、極めて貴重であり、ベラルーシ、ウクライナ、カザフスタン、ロシアの専門家らと積極的にシェアしている。

一番大事なことから着手している、それはつまり、いかに正しく研究を系統立て、データの確実性を評価し、得られた結果の本質に基づき、明確な結論を導き出し、勧告を行うということである。

放射線障害は点状の分子・遺伝子損傷レベルで考察され、細胞組織の修復技術、リスクと可能性を追跡する。データ記録には70年以上の情報が蓄積されている。ホットスポットは、被曝線量、ガン罹患、死亡率である。

原子爆弾の被害の生存者の平均年齢は80歳を超えている。医療水準には驚きを覚える。我々に対して、5つの悪性腫瘍の治療ケースが開示され、様々な適時の診断と高度な医療技術が示された。300床の赤十字病院ではPET、2台のCT、MRI 2台が備えつけられ、長崎大学病院では毎週肝移植術が行われている。

チェルノブイリ原子力発電所における事故の後影響の処理に日本の研究者による支援は比類なきものであった。たくさん問題が生じた、それはスクリーニングが必要か、先ず、第一に住民のどの層を診療すべきか、何を対象にするかなど。組織的、医療、科学技術の伝達は効果的に実施され、線量管理、専門家の巡回チームも編成され、診断・治療機器を設備する支援も行われた。チェルノブイリ原発事故から

30年たった今日、最小の人的被害と、汚染地域の部分的復興について話せる状態になった。この際、科学的研究は変わらず行われ、分子生物学の新しい知識と可能性を鑑みて新しい力を得ている段階である。

日本にとって2011年における福島原発事故は深刻な試練となった。

ここでは長崎大学原爆後障害医療研究所の研究知見が隣接地域を判定し、食料品、飲料水の供給に関する勧告、影響の排除に関する課題の優先順位づけを素早く行わしめた。

科学的研究への国民の信頼の顕著な例となったのは、事故を起こした原子力発電所に近接する川内村の経験である。

計器が示すことは明快である。村では線量水準は許容量を超えていない、これは居住が安全であることを示している。住民は家に戻ることを決心した。全地域、特に、学校、店舗、幼稚園などの除染による準備作業がおこなわれた。

現在、川内村では長崎大学の復興推進拠点が活動しており、専門家らが状況管理を続けており、相談や他の支援を住民に行い、ボランティアが積極的に活動している。

私が何よりも大きな衝撃を感じたのは、大きな経験と知識に裏打ちされた活動の組織によって、事故の状況下で、住民のパニック発生時に、避難を主導し、放射線の悪影響を最小限に止め、人々に安心を植え付けることができたということである。

世界には原子力発電所が多く存在しており、常に、平和利用としての原子力技術が向上し、安全システム、緊急時の迅速対応のシステムが発達し続けている。地球上で平和な空を守る人とともに、長崎原爆後障害医療研究所と長崎ヒバクシャ国際医療協力会（ナシム）の研究者・専門家が最前列に立っているのである。



Cherniakova Yuliya (チェルニャコーワ ユーリア)

ベラルーシ共和国 ゴメリ医科大学
外傷・整形外科 准教授

2016年夏私は原爆後障害医療研究所と長崎大学病院にてNASHIM研修プログラムに参加しました。私達のグループにはロシア、ベラルーシ、カザフスタン、ウクライナの代表が参加しました。それぞれがチェルノブイリ原子力発電所事故や核実験場の放射能汚染により被害を受けた地域から参加しています。

研修時には私たちは、甲状腺がんの問題や広島と長崎の原爆、同様に原子力発電所の事故による後障害の研究に関して講義を聞きました。

山下俊一教授、高村昇教授の実践的で社会的に重要な研究の講義が興味深かったことを特筆したいと思います。両氏は大きな学術研究を行っているのみならず、放射線の安全性の問題を日本の各地で国民に啓蒙していらっしゃいます。

研修によって私は自身の職務に、また、ゴメリ市の医科大学の学生への指導に役立つ新しい知識を得ることができました。その中でも最も重要なものは日本の原子爆弾投下地域の医学的また心理的後障害、そして、震災の結果生じた福島原子力発電所の水素爆発に関することでした。

研修のオーガナイズのおかげで私達は長崎と広島平和記念資料館を訪れ、また、長崎では第71回平

和祈念式典への参加も叶い、原子爆弾の地獄を生き抜いた被爆者の方との交流を持つこともできました。戦争によって破壊された町を復興しただけでなく、常に、世界の全ての国に、そしてその指導者らに平和を呼びかけ、核兵器と戦争のない生活を呼び掛けている日本の方々の勤勉と忍耐に深い尊敬の念が湧きます。自身が高齢でありながら積極的な人生を送り、原爆資料館にてガイドを務め、記念の行事に参加し、自分の経験を子供たちに語っているというは大変に重要なことです。世代を通じて悲劇の出来事の記憶を留め、新たな戦争を起こさないという思いを強くするためにこれらはすべて必要不可欠なことです。

広島医科大学廣橋伸之医師の講義は私に大きな印象をもたらしました。氏は福島での原発事故時の被害者への救済に参加した自身の経験を語ってくださいました。ベラルーシとウクライナのチェルノブイリ事故後障害の処理経験は福島原子力発電所と放射線からの保護、汚染地域からの住民の避難、事故後の健康被害など問題を同じくしているとわかりました。

長崎大学病院の外傷センターを訪問し、業務に参加させていただく機会を得ました。尾崎誠教授、宮本俊之准教授からのご助言、院内でのご指導、そして、米倉暁彦医師には手術への立ち会いをご許可頂きまして心から感謝します。

院内設備とオペ室の高度医療機器の充実ぶりは感動しました。それによって医大生と若い医師が世界的レベルに教育されることが可能となっています。若い医師らは几帳面に自身の業務をこなしており、綿密に準備し手術を遂行していました。病院では私はベラルーシでの私の仕事について、ベラルーシの外傷学学校と新しい治療法についてお話をさせていただきました。

研修を成功に導く一旦を担ったのは通訳の豎山さんでした。すべての研修日程にて同行し、正しくロシア語に通訳し、私たちが理解しにくいことを説明してくれました。

ナシムにご招聘いただき、またとない日本訪問の機会を頂きましたこと、長崎大学と原爆後障害医療研究所の先進的な専門家の講義を聴講させていただきただけましたことを御礼申し上げます。ゴメリ医科大学での学生の指導に今回研修で得た知識を活用させていただきます。日本での好印象で受け止めた様々なことを医者の同僚や大学の講師らに伝えてまいります。



放射線影響研究所にて

韓国へ専門家派遣事業(セミナー)を実施



韓国専門家派遣事業のセミナーに参加して

長崎大学 原爆後障害医療研究所 所長 永山 雄二

2016年9月4日から5日、一泊二日の強行軍で、韓国の仁川(インチョン)赤十字病院で行われたNASHIM 専門家派遣事業のセミナーに講師として参加しました。講師として私のほか原研内科の宮崎先生に参加していただきました。県の担当の西さんと、通訳の朴智賢^{パクジヒョン}さんも加わっての4人旅でした。実はこのセミナーは今年の1月24日に計画していたものの、折からの大雪で福岡空港へ行くことができず、JR博多駅ビルの中の講堂で一晩過ごすこととなった苦い経験のリベンジの機会でした。

高速バスで早朝7時に長崎を出発し、2時間半かけて福岡空港へ向かいました。しかし今回は雪の代わりに我々の後を台風が追いかけてきました。何とか福岡空港から無事に飛行機が飛び立った時は本当にほっとしたのを覚えています。私たちの心配をよそに飛行機は1時間半のフライトの後、順調に仁川国際空港へ到着しました。入国手続きもスムーズに終え、到着ロビーに出ました。先ずタクシーで宿泊先のラマダ・ソンドホテルへ向かいました。仁川空港は広い干潟を大規模に埋め立てて造成した土地の上に建っています。そこから長い橋と高速道路で結ばれた松島(ソンド)にホテルはあります。ソンドという名前のとおり美しい松波が広がっています。仁川広域市はソウル、釜山に次ぐ韓国第三の都市で290万人の人口があります。仁川空港からソウルへ向かう途中に通過するばかりで、今まで訪れたことはありませんでした。空港鉄道(AREX)でソウルへ43分で到着できる街ですが、朝鮮戦争のとき、ソウルを奪還するために、連合国軍による海からの上陸作戦が決行された、まさにアジアのノルマンディーともいえる町で、マッカーサー将軍が上陸したポイントが記念公園として整備されています。ここには当時作戦に実際に使用した上陸用舟艇や戦車などが展示されているほか、上陸作戦のジオラマとか映像による説明があり、作戦について総合的に学ぶことができる場所となっています。高層マンションが立ち並ぶダウンタウン



宮崎先生の講義



仁川赤十字病院前にて

ンから少し離れた高台に食堂が多く立ち並び、マンションの住民が食事に来るレストラン街となっています。中国にも近いことからチャイナタウンもあり、中華料理の店も多く、中でもジャージャー麺が有名とのこと。この日はマッカーサー上陸記念公園などを散策し、プルコギをいただきました。甘みのあるたれに漬け込んだ薄切りの牛肉や野菜を専用の鉄板で焼いていただきます。ちょっと甘めのすき焼きといったところでしょうか。日本人客にも人気とのことでした。

二日目は大韓赤十字社の朴炳熙^{パクビョンヒ}さんと金昭廷^{キムソジョン}さんが手伝いに来られ、仁川赤十字病院で合流しました。院長のソン・ミンス先生にお会いし、セミナー開催のお礼を申し上げました。

仁川赤十字病院の外来は1日に150人から160人、病床数は160ほどで、それほど大きな病院ではありませんが、子供リハビリセンターというユニークな施設があり、韓国中から子供の患者さんが来られるとのことでした。

セミナーはランチョン形式で行いました。まず宮崎先生が「放射線の造血器に与える影響」について講演しました。その後私が「放射線災害：長崎、チェルノブイリ、福島と比較」と題して講演しました。セミナー全体で1時間しかありませんでしたので、英語での講義となりました。英語で講義を行った後に韓国語で朴さんが説明を加えてくれました。

講義の後、次のような質問が出されました。

質問▶ 原爆投下から随分年月が経っているが、被爆者の2・3世への遺伝的影響はあるのか。

回答：追跡調査中であり、現在の調査と研究では発見されていないが、原爆による被爆は広島、長崎でのケースしかないため、今まででは見つかっていなくても、今後出る可能性が無いとは言い切れない。よって、これからも継続して調査していく予定である。

質問▶ 一般人と被爆者の白血病治療の予後はどのような差があるのか。

回答：実は良くわからない。現在は被爆者の白血病発症が少ない上、原爆投下後、被爆者が白血病でたくさん亡くなった当時は今のように医学が発達していなかったため、データを得ることが出来なかった。よって、一般の白血病との比較できる資料がない。しかし、最近では被爆者で骨髄異形成症候群（MDS）の増加がみられるため、現在研究中である。

質問▶ 爆心地から3Km以上距離が離れた場合、自然放射線量とそれほど変わらない、とのことだが、3Km以上離れていれば大きな影響はないと考えても良いのか。また、他に自然の中の風や空気などによる影響はないのか。

回答：今回のセミナーでは放射線量による影響を説明したが、原爆の影響は放射線に限られるものではない。爆風や熱線による火災、火傷、強い精神的ダメージなど、総合的に影響を受けるもとだと考えれば良いと思う。また、風や雲により特定地域に流された放射性降下物が蓄積されている。

以上、3つの質疑応答がありました。時間の都合で後半の講義についての質問時間が取れなかったのが残念でした。

韓国の被爆者の治療に当たる先生方にヒバクシャ医療についてさらに関心を持ち続けていただき、日韓がお互いに協力して被爆者支援を進めていくこと、そして放射線の健康影響についての知識を日本内外に広めていくことの重要性をしみじみと感じました。

帰路は台風が通り過ぎた日本に困難なく帰国できました。

最後になりましたが、今回のセミナー開催にあたってご尽力頂いた仁川赤十字病院の皆様、大韓赤十字社の皆様に感謝申し上げます。

五島市、長崎市で出前講座を開催しました。

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及し、被爆者医療にもっと関心を持っていただくため、長崎大学の原爆後障害医療研究所の先生方に小中学校を訪れて講義を行っていただく「出前講座」を実施しています。平和と科学、医療に関する国際協力への興味・関心を促すことのできる楽しい講座です。

今年の第1回は7月3日に五島市の玉之浦中学校で出前講座を開催しました。玉之浦中学校は生徒数が全校で22名ですが、この全校の生徒さんを対象として、長崎大学の三根真理子先生が、「長崎原爆被爆者のこころの調査」と題して1時間の講義を行いました。

第2回は7月5日に長崎市立三重小学校で5・6年の生徒さん50名を対象に開催しました。長崎大学の松田尚樹先生が、「放射線・紫外線とわたしたちの健康」と題して1時間の講義を行いました。

さらに第3回は7月6日に長崎市立長崎中学校において3年生90名を対象に開催しました。長崎中学校の卒業生でもある三根真理子先生が、「長崎原爆被爆者のこころの調査」と題して1時間の講義を行いました。

出前講座開催に際しては、会場の準備等でお手数をおかけした先生方にお礼申し上げます。



三重小学校で講義する松田先生

受講された生徒さんの声をいくつかお伝えします。

- 私は原爆の被害や原爆についてのことを調べたり、教えてもらったりしていたけれど、救護のことやそれに関わった人などのことはよく知りませんでした。だから、初めて知れたことや感じたことがたくさんありました。

私はこれから大人になって、原爆のような核兵器や戦争がなくなるよう自分にできる小さなことを見つけていきたいと思います。

五島市立玉之浦中学校

- 僕が、はじめて知ったことは、放射線をあびすぎると白内障になったりすることや放射線の一部が体を通り抜けることがわかりました。そして原爆には放射線などがふくまれていると聞いたので、その放射線が体を通りぬけて、細胞に傷をつけていたということがこわかったです。これからはぼう子をかぶったりして紫外線をさえぎりたいと思いました。そして、オゾンホールが年々なくなってきたということがとてもびっくりしました。

長崎市立三重小学校 5年

- 三根先生の講話を聞いて、原子爆弾というのはとても恐ろしい核兵器だと思いました。そのことが長崎の歴史にあるということで、すごくビクビクしました。爆弾の中の放射線という光はあびすぎると斑点ができてしまい、死に至るということをはじめて知りました。戦争はもう絶対にしてほしくないと思いました。戦争が続いている国はありますが、日本から世界に平和を広げていきたいです。

長崎市立長崎中学校 3年

小学校高学年から中学校まで、関心の程度に合わせて内容や講義時間は調整可能です。時間は30分から1時間まで。本機関誌最終ページに出前講座受講募集のお知らせを掲載いたしておりますほか、ナシムホームページでも掲載しておりますので、興味をお持ちの方はナシム事務局までご連絡ください。



母校・長崎中学校で講義する三根先生

小中学校で出前講座を開催します

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及するため、長崎大学の先生方に小中学校へ出向いていただき講義を行う出前講座を実施しています。平和と科学・医療に関する国際協力への興味・関心を促すことのできる楽しい講座です。

小学校高学年から中学校まで、関心の程度に合わせて内容や講義時間は調整可能です。時間は30分から1時間まで。

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明いたしますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。



五島市立玉之浦中学校にて

講座メニュー	
放射線って何？－身近な放射線の話	
放射線・紫外線とわたしたちの健康	
長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査
	長崎原爆被爆者のこころの調査
放射線といのち	